

「男らしさ」の呪縛 DV我慢

妻から暴言・暴力5年

「お前は仕事ができないから帰りが遅くなる」と数時間説教され、帰宅して夕食ができていないと菜箸でつつかれた。度重なる暴言や暴力に加えて、常に監視されている恐怖感。「自宅は地獄」だった。

これは夫から妻ではなく、妻から夫へのDV(家庭内暴力)の話だ。

四国地方に住む30代の男性は約5年にわたり、被害を受け続けたが、長らく助けを求められず、苦しめられた。

男性が元妻の変化に気づいたのは、結婚直後のことだった。ある日、携帯電話のメモリーに入っている女性の電話番号がすべて無断で削除されていた。半生時代の友人だけでなく、上司や同僚の名前も見当たらない。理由を尋ねると「結婚したら、女性の電話番号はいらないでしょ」とあっけらかんと返ってきた。

「新婚だから嫉妬かな」と最初は思っていたが、次第に男友達の連絡先も消えていった。「僕を私物化したかったのかも」と今では思う。結婚から1カ月が過

家庭内の悩み 話せず孤立

きると、暴力がエスカレートした。夫婦共働きながら、ほとんどの家事を引き受けていた男性が炊飯器のスイッチを入れられるとビンタされ、飲み会で帰宅が遅くなると真冬の玄関前で朝まで立たされた。「お前はクズだ。底辺の人間だ」。トイレットペーパーなどの生活用品のストックが切れただけで暴力暴言が続いた。

ついには包丁を突きつけられた。不機嫌だった元妻が急に怒り出した末のことだ、何が原因かわからなかった。それでも「自分が悪いから怒られる。もっと頑張らないといけない」と自分を責めていた。義父母に相談しても「男が我慢するものじゃないのか」と突き放され、美家の両親には心配させないよう「夫婦げんかが多い」としか言えなかった。「男らしさ」に呪縛

され、「自分が我慢すれば結婚生活は円満になる」と抱え込み、孤立していた。「家庭内の悩みを誰かに話す選択はなかった」と振り返る。

自分が被害を受けていると認識するようになったのは、同僚の女性から夫のDVについて相談を受けたことがきっかけだった。「自分と似ている」と感じ、女性の勤めもあって徳島県内でDV被害者支援に取り組み一般社団法人白鳥の森に相談した。野口登志子代表理事から「男性への暴力も許されることではない」と聞き、「DVは男性から女性への暴力のことだ」との考えを改めた。

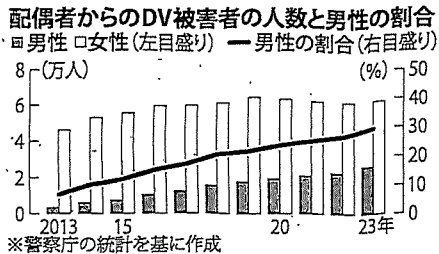
離婚を決断し別居を始めること、元妻からはストーカー行為を受けるようになった。自宅の玄関にムカゴの死骸を置かれるなど嫌がらせを受けたが、野口代表理事らに弁護士を紹介してもらい、離婚調停が成立した。

配偶者パートナーからのDVを受ける男性が増えている。警察庁によると、パートナーからDV被害を受けた男性は2023年に2万6175人で全体の29.5%。女性の方が多い状況ではあるものの、13年に3281人(6.6%)だった男性被害者は、18年には1万5964人(20.6%)となり、年々増加している。以前よりは男性が被害を訴えやすい環境になりつつあることが背景にあるとみられる。

一方で、DV被害を周囲に相談できない男性は依然として多い。白鳥の森によると「男だから」というエンター意識が被害を気付きつらしたり、相談しづらい状況に陥るという。野口代表理事は「相談窓口は各地域にあるが、男性は恥ずかしさから窓口に来られない人も多い」と話す。相談に来る男性の多くは、家族や知人が異変に気づいたケースという。被害男性の家族から「女性被害者の窓口のようですが、男性も可能ですか」と聞かれたこともあった。

DV被害に詳しい広島大ハラスメント相談室の北仲千里准教授(社会学)によると、相談窓口でDV被害者の夫が妻を取り返すために来ることも少なくないという。相談員は男性が来る「加害者ではないか」と警戒するため、北仲准教授は「まずは男性と女性の相談窓口を分けた方がよい」と指摘する。「DVの被害者は女性という認識がまだ根強いが、男性被害者への政策にも力を入れるべきだ」と話す。

四国に住む男性は離婚後の現在、穏やかな日常を取り戻している。ただ、被害から数年がたっても、取材で当時のことを聞くと肩を震わせ、声を詰まらせた。「DVを受けていると気付いていない男性も多いはず。男だから強くなければいけないというのとは間違いない。おかしいと思ったら遠慮せず周りに相談してほしい」。自分のような被害者が増えないことを願っている。【川原聖矩、写真も】



相談者の話を聞く一般社団法人「白鳥の森」の山口凛理事(左奥)と野口登志子代表理事(徳島県で)